

革命いまだ成らず



長崎の鈴木天眼宅を訪れた孫文

1913年(大正2)2月22日

右から西郷四郎、鈴木天眼、孫文、鈴木タ

ミ、福島熊次郎、宮崎滔天、金子克己

(長崎歴史文化博物館提供)



大正12年に就航した長崎-上海を結ぶ日華連絡船「長崎丸」と「上海丸」

(長崎歴史文化博物館蔵)

■ 盟友たち

孫文の革命事業を多くの日本人、在留華僑が支援しました。長崎では東洋日の出新聞社長の鈴木天眼(てんがん)、同社記者で柔道家の西郷四郎、佐世保出身の金子克己(かつみ)や華僑たちだけでなく、ごく一般の市民も支援したことが知られています。また全国的にも犬養毅、宮崎滔天(とうてん)、内田良平など著名な人々が支援者として名を連ねています。

■ 大アジア主義

1924年(大正13)11月28日、孫文は神戸の旧制神戸高等女学校講堂において支援者や経済団体などを対象とした講演会を開催します。孫文が訴えたのは、アジア諸民族の連帯・団結によって、武力を基礎とした覇道を行う欧米列強のアジア侵略に対抗し、古来アジアにある仁義道徳を基礎とした王道で新しいアジアを築いていこうという「大アジア主義」の思想でした。東洋日の出新聞には、上海丸船上で孫文が語った「大アジア主義」演説の骨子が掲載されています。

■ 孫文急逝

第一次世界大戦の戦後処理や日本が中国に対して行った21か条の要求をきっかけに五・四運動が起きました。孫文は、この民族主義運動の動静を気にかけてつ1919年中国国民党を結成し、1924年には共産党との協力体制、国共合作も整えました。北京政府は内部分裂を起こし、孫文の第三革命完成があとわずかと見られたときに「大アジア主義」講演が行われたのでした。しかし、このとき既に孫文の体は病魔に冒されており、1925年3月に肝臓癌のため急逝してしまいます。

■ 遺志を継ぐ者たち

孫文亡き後、梅屋庄吉は彼の遺業を讃えるため、1929年(昭和4)中国へ4体の孫文像を贈っています。一方宋慶齡も孫文の遺志を継ぎ、三民主義実現と祖国の発展のため生涯をかけ、「国民と結婚した」と称されるほどの生涯を送りました。孫文と共に戦った同志たちやその支援者たちによって、孫文の辛亥革命は続けられたのです。